

事項	アシグロハモグリバエの発生拡大とハモグリバエ類適用薬剤の殺虫効果		
ねらい	海外からの侵入害虫であるアシグロハモグリバエについては、平成17年度指導参考資料で発生実態と防除対策を取りまとめているが、その後も発生市町村を拡大してきているため、現時点での発生状況及び登録薬剤の殺虫効果を取りまとめ、防除対策上の参考に供する。		
指導 参考 内容	<p>1 発生状況</p> <p>(1) 平成16年に6市町村(平成20年現在の市町村区分)で発生が確認され、平成20年には16市町村で発生が確認されている。</p> <p>(2) これまでに県内で寄生が確認された植物は18科に及び、野菜類が8科25作目、花き類が11科17品目及び雑草が4科4種となっている。</p> <p>2 被害特徴と発生拡大の要因</p> <p>(1) 本種の被害は、主に施設栽培で認められる。また、きゅうり、ほうれんそう及びアスターなどが好適な寄主作物と考えられ、毎年、多発被害が確認されている。これらの作物が増殖源となって、圃場の発生密度が急激に高まり、露地栽培を含め、周囲の作物に被害を与えている場合が多い。</p> <p>(2) 本種の寄主範囲は広く、無加温の施設内で越冬することが可能である。このため、自家用の野菜・花き類を含め、複数の作物を施設で周年栽培している圃場では、越冬場所が確保され、継続的に被害が発生する。</p> <p>(3) 発生が拡大している要因は、主に寄生苗の持込みによるものである。また、本種は、春～夏にかけて多発する傾向があり、この時期に、自力で移動分散し、周囲の圃場に発生が拡大することがある。</p> <p>3 ハモグリバエ類適用薬剤の殺虫効果</p> <p>(1) 幼虫に対する殺虫力の簡易検定では、カスケード乳剤、アフーム乳剤及びスピノエース顆粒水和剤で高い効果が認められる。</p> <p>(2) 合成ピレスロイド剤であるアディオン乳剤は、ほとんど効果が認められない。また、ハチハチ乳剤は、ナモグリバエに対して高い効果を有する薬剤であるが、本種に対しては効果が劣るとみられる。</p>		
期待される効果	アシグロハモグリバエの被害防止を図るための資料として活用できる。		
利用上の注意事項	<p>1 本資料は平成21年3月2日現在の農薬登録に基づいて作成した。</p> <p>2 農薬を使用する場合は、必ず最新の「農薬登録情報」(<a href="http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/">http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/</a>)を確認すること。</p>		
担当部署 (担当氏名)	青森県農林総合研究センター畑作園芸試験場 病害虫防除室 (松田正利、新藤潤一)	対象地域	県下全域
発表文献等	<p>平成16～20年度 青森県有害動植物予察事業年報</p> <p>平成17年度 指導奨励事項・指導参考資料等</p> <p>平成16～17年度 青森県農林総合研究センターフラワーセンター21あおもり成績概要集</p> <p>平成18年度 青森県農林総合研究センター畑作園芸試験場成績概要集</p>		

【根拠となった主要な試験結果】

表1 アシグロハモグリバエの発生確認市町村

(平成20年 青森農林総研畑園試)

年次	市町村名	市町村数累計
平成16年	青森市、弘前市（旧弘前市及び相馬村）、平川市（旧尾上町）、藤崎町（旧藤崎町及び常盤村）、田舎館村、南部町（旧名川町及び福地村）	6
平成17年	三沢市、八戸市、南部町（旧南部町）	8
平成18年	三戸町、横浜町*	10
平成19年	おいらせ町、五戸町*	12
平成20年	黒石市、平川市（旧平賀町）、平内町、田子町*、六ヶ所村*	16

(注) 1 ※ 生産者からの被害株の持ち込み及び普及指導員による確認。  
2 発生確認市町村数の累計は、平成20年現在の市町村区分によって示した。

表2 アシグロハモグリバエの寄生が確認された作物及び雑草

(平成20年 青森農林総研畑園試)

科名	作目及び雑草名	科名	作目及び雑草名
アカサ*	(野菜) ホウレンソウ (雑草) シロサ*	サクラソウ	(花き) プリムラ類(ジュリアン、ボリアン)
アルストロメリア	(花き) アルストロメリア <sup>(注)1</sup>	スミレ	(花き) ハンジュー・ピオラ
アフラナ	(野菜) カブ、チンゲンサイ、オタムホエム、キャベツ、ダイコン、コマツナ <sup>(注)2</sup>	ツルムラサキ	(野菜) ツルムラサキ
ウリ	(野菜) カボチャ、キュウリ、メロン、スイカ	ツクサ	(雑草) ツクサ (花き) ベチユニア
キキョウ	(花き) カンパニュラ	ナス	(野菜) トマト、ミニトマト、パレシヨ、ピーマン、ナス
キク	(野菜) レタス、シュンギク、ゴボウ	ナテシコ	(花き) 宿根カスミソウ、ナテシコ
	(花き) キク、マリゴールド、アスター、ダリア、サイベリア、ガザニア、ヒマワリ	ヒユ	(花き) ケイトウ (雑草) イヌヒユ
	(雑草) ヒメムカシヨモギ	マメ	(野菜) ダイズ、インゲン、エンドウ <sup>(注)2</sup> 、ソラマメ <sup>(注)2</sup>
キンポウゲ	(花き) アネモネ	リントウ	(花き) トルコギキョウ
クマツツラ	(花き) パーベナ	ユリ	(野菜) 絆*

(注) 1 寄生葉から成虫が得られず、種は未同定であるが、被害の状況からアシグロハモグリバエと判断されたものを示す。  
2 飼育試験による寄生確認を示す。  
3 ゴシツクは、平成17年以降に確認された寄主植物を示す。

表3 ハモグリバエ類適用薬剤のアシグロハモグリバエ幼虫に対する殺虫効果 (平成18年 青森総農研畑園試)

系統	薬剤名	希釈倍数	供試数 (ふ化数)	死虫率 (%)		ハモグリバエ類に適用のある主な登録作物名
				幼虫	幼虫+蛹	
I G R	カスケード乳剤	4,000	71	15.5	100	なばな類
マクロライド	アフファーム乳剤	2,000	81	88.9	92.6	非結球あぶらな科葉菜類(のぎわな・チンゲンサイ・こまつなを除く)、未成熟豆類(さやいんげんを除く) 花き類・観葉植物
	スピノエース顆粒水和剤	5,000	56	71.4	100	かぶ、トマト、レタス 非結球あぶらな科葉菜類(みずな・長崎はくさいを除く)
合成ピレスロイド	アディオオン乳剤	3,000	79	5.1	27.8	未成熟豆類(さやえんどう・未成熟そらまめを除く)
その他	ハチハチ乳剤	1,000	76	43.4	59.2	トマト、きく
対照	展着剤・新グラミンS	3,000	177	2.3	29.4	—

(注) 1 幼虫：死虫率=(1-蛹化数/ふ化数)×100、幼虫+蛹：死虫率=(1-羽化数/ふ化数)×100  
2 平成18年2月22日に青森県弘前市清野袋でハウス栽培されていたトマト及びホウレンソウから幼虫・蛹を採取し、コマツナ及びチンゲンサイで1世代増殖したものを供試した。  
3 薬剤処理は、若中齢幼虫(産卵4日後)が寄生したインゲン初生葉を葉液(展着剤加用)に5秒前後浸漬して行った。